

令和 3 年 6 月 28 日現在

機関番号：32618

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02311

研究課題名(和文)近世期挿絵本や絵本にあらわれる画題の変遷による近世挿絵史の再構築

研究課題名(英文)Reconsideration on history of illustration observed in illustrated books in early modern period from the viewpoint of change in subject

研究代表者

佐藤 悟 (SATO, SATORU)

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：50178729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀に発生した合巻は草双紙が読本化したものではなく、合巻も読本も絵本化したため、挿絵に特色のある文芸となった。その原因となったものは文化元年五月に起きた『絵本太閤記』の絶板であり、江戸における絵本の色摺禁止令であった。これにより江戸の絵本や読本は上方とは異なる発展を遂げたことを葛飾派絵本の研究により明らかにすることができた。

2020年4月以降、新型コロナウイルス流行の影響により、国内外の資料所蔵機関に対する研究調査の実施が不可能となり、研究計画を大幅に変更することを余儀なくされたため、デジタルマイクロスコープを使用した研究を実施し、紙に含まれる米粉の役割を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の読本と合巻の比較で論じられてきた19世紀江戸文学の研究において、絵本というあまり注目されてこなかった要素を歴史的な背景も踏まえて導入し、新しい読本や合巻像を捉えることができた。また色摺絵本や墨摺絵本の製作が地域性を反映していることも明らかにした。

デジタルマイクロスコープを使用することにより、文理融合型の研究を行い、江戸時代の多色摺絵本の成立には、米粉を充填剤、平滑剤として使用した紙の存在が不可欠であったことを明らかにした。さらに天保改革における『修紫田舎源氏』の絶板が内容によるものではなく、その価格にあったことを明らかにした。これは天保改革と文学の関係に新しい視点を開くものとなった。

研究成果の概要(英文)：We studied on Gokan (popular novels in cheaper price), Yomihon (popular novels with subjects of adventures and romances) and Ehon (the pictorial books). Characteristics of Gokan and Yomihon is considered to become similar to that of Ehon in the 19th century. This was caused by a ban issued in May 1804 by Wakisaka Yasutada, the high ranking official of Tokugawa shogunate government, who prohibited publishing "Ehon Taiko-ki" which told a history of his ancestor. We studied these problems through research on a publication system and regulation by the Tokugawa shogunate. Furthermore, it was necessary to observe fiber and the rice flour in the Japanese paper used for books. This is because a study of the paper used for books has significance in study on publication.

Research fields are as follows. Gokan, Yomihon, "Ehon Taiko-ki", "Hokusai-manga", rice flour, "Nisemurasaki Inakagenji", Ryutei Tanehiko, Katsushika Hokusai, Otsu-e, Reform in 1842 (Tennpou Kaikaku).

研究分野：日本近世文学

キーワード：合巻 読本 絵本 紙の繊維 米粉 柳亭種彦 修紫田舎源氏 葛飾北斎

1. 研究開始当初の背景

近世文学は木版という技術を背景に発達した文学形態であって、本文だけではなく、挿絵も大きな意味を持っている。しかし挿絵の研究はなおざりにされ、特に何が描かれているのかという画題の研究は僅かな研究者しか扱ってこなかった。また浮世絵についても画題の研究は鈴木重三をはじめとする僅かな研究者の考証があるのみであった。そのような中、佐藤は鈴木春信の錦絵の画題について十数点の画題を確定したが、これすら浮世絵の研究者には受け入れられてこなかった。また絵本の研究に至っては、第二次世界大戦前の仲田勝之助、相見香雨の研究、戦後の松平進による菱川師宣、西川祐信絵本の研究、永田生慈による葛飾北斎絵本の研究等、限られたものしかなかった。以上が研究開始当初の背景であった。

2. 研究の目的

研究の目的は以下の通りである。

- 1 画題を通じて 19 世紀の合巻、読本の挿絵と絵本の挿絵の相互関係とその変遷を探求する。
- 2 19 世紀になると草双紙は合巻として読本に接近し、伝奇性を強めていくというのが従来の定説であったが、両者の関係を絵本化という仮説に基づいて研究を行う。
- 3 合巻、読本、絵本の出版を支えたシステムの研究を行う。
- 4 近世には当局による規制が絶えず行われていたので、その影響を研究する。

3. 研究の方法

草双紙、読本、絵本類の徹底した書誌調査から、それぞれの持つ特性を明らかにするという方法を採用した。国内では国立国会図書館、都立中央図書館、大阪府立中之島図書館、京都大学図書館、京都大学文学部図書館が、国外ではソウル大学校(韓国)、韓国国立中央図書館、フランス国立図書館、ギメ美術館(フランス)が調査の対象となった。新型コロナウイルスの影響により、海外渡航、国内移動も困難となったため、上記以外の所属館の調査は不可能となったが、インターネット上で公開された画像資料を中心に、大英図書館、ボストン美術館、スミソニアン博物館、メトロポリタン美術館等の資料の研究を遂行した。研究成果(1)～(6)がこれに該当する。

新型コロナウイルスの影響で国内外の出張調査が不可能となったので、デジタルマイクروسコープを使用して蒐集した絵本や合巻を主とした草双紙の用紙の様相の観察を行った。その成果が研究成果(7)である。

これらの研究成果を学会やシンポジウムにおいて口頭発表し、第三者による検証を仰ぐという方法をとった。なお、その成果の一部は 2021 年度中に 2 本の論文として活字化される予定である。

4. 研究成果

(1) 大津絵が近世文学の中にどのように利用されているかの研究を行った。その成果が佐藤悟「近世文学と大津絵」(2017)であり、式亭三馬の合巻『吃又平名画助刃』(1808)における利用例、山東京伝『骨董集』(1814 - 1815)における研究態度について論じた。中でも柳亭種彦作、歌川国貞画の合巻『御詠染遠山鹿子』初編(1830)が大津絵節の流行を取り入れて執筆され、そこに引用された大津絵節が現存最古の大津絵節であることを明らかにした。『守貞謄稿』(1837 年起筆)所引の大津絵節が古態を伝えるものではなく、むしろ現在の大津絵節が古態を残していることを明らかにしたのは近世歌謡史においても重要な発見であった。さらに佐藤悟「大津絵節と合巻」(2021)において、市川団十郎作、歌川国貞画の合巻『後三年手煉義家』(1826)の表紙が大津絵節の流行によって本文と関係なく描かれたこと、墨川亭雪磨作、溪斎英泉画『紅粉画昔風俗』が大津絵節の流行によって描かれたことを明らかにした。

(2) シンポジウム「追憶のなかの 江戸 - 江戸は人びとの記憶のなかでどのような都市として再構成されたのか - 」(法政大学、2019 年 2 月 20 日)において「千年飴をめぐる諸問題 - 柳亭種彦の考証随筆 - 」という招待講演を実施した。柳亭種彦『還魂紙料』中の「千年飴」の考証を再検討し、規制の影響、考証の誤りを絵本、浮世絵等を使用して論じた。これによりパフォーマンスを伴う物売りの絵画化という問題を提起することができた。本発表は「七兵衛という飴売り 柳亭種彦の考証随筆『還魂紙料』」(2020)として活字化された。

(3) 第 11 回絵入本ワークショップ(韓国ソウル市明知大学校、2018 年 12 月 15 日)において基調講演「草双紙の世界 ソウル大学校所蔵本を中心に」を行い、赤本、黒本、青本が並存して刊行されたという仮説、および合巻の成立がその絵本化であるという仮説を紹介し、あわせてソウル大学校所蔵合巻の特質について論じた。第 12 回絵入本ワークショップ(大阪大学 ZOOM 会

場、2020年9月19日)において「赤本『女はちの木』について」を發表し、二代目鳥居清信画『女はちの木』の赤本としての性格を論じると共に、「女鉢の木」の画題の変遷、および仮説にとどまっていた赤本、黒本、青本が並存したことを三田村彦五郎旧蔵本により証明した。「第3回日本語の歴史的典籍国際研究集会」(国文学研究資料館、2017年7月28日)において佐藤悟「絵本としての草双紙」を發表した。合巻の摺付表紙の発生を絵題簽が拡大して成立したことを論じ、題簽という扱いであったため、文化元年五月十七日に出版された『絵本太閤記』絶板に伴う色摺禁止令の規制対象外であることを論じた。

(4) 柳亭種彦の西村屋与八からの合巻や読本の刊行が葛飾北斎ら北斎派の画工を含む狂歌グループの後援によってなされたことを佐藤悟「十九世紀江戸文学における作者と絵師、版元の関係」(2017)において明らかにした。同時に柳亭種彦作、蘭斎北斎画の合巻『鱸包丁青砥切味』(1811)の挿絵の登場人物の顔が役者似顔絵を使用していることを草稿本を用いて指摘した。これは挿絵を北斎派の画工が担当したため、歌川派に多用された役者似顔絵の使用はないものと考えられていたが、この指摘により柳亭種彦と歌舞伎との関係に新たな視点が開かれた。

(5) 国際浮世絵学会第22回秋季大会(専修大学、2017年11月25日)において佐藤悟「文化元年の彩色摺禁止令と絵本」と題する発表を行った。葛飾北斎が永楽屋東四郎ら名古屋の書肆と関わるようになった背景には、江戸の書肆角丸屋甚助の介在したこと、色摺の禁止令により、江戸における彩色摺絵本の出版が不可能になったこととの関係を論じた。『北斎漫画』の制作が名古屋ではなく江戸で行われた可能性を指摘して論議となった。また寺社奉行であった脇坂安董の動向が、江戸における出版規制に影響を与えたことを指摘した。日本近世文学会135回大会(愛媛大学、2018年10月22日)において佐藤悟「柳亭種彦と葛飾北斎・西村屋与八の関係 文政期江戸出版の構図」を發表し、角丸屋甚助没後、北斎絵本の主要板元となった西村屋与八と北斎の間に入ったのが柳亭種彦であること、北斎と西村屋与八との提携により「富嶽三十六景」「百人一首姥かゑとき」のようなシリーズが生み出されたのも絵本出版がきっかけであったこと、西村屋の経営不振から、北斎に与えた影響を論じた。さらに第23回国際浮世絵学会春季大会(Zoomによるオンライン開催、2021年6月20日)において、佐藤悟「19世紀絵本の地域性 色摺本と墨摺本」において、色摺禁止令により、江戸と上方名古屋では絵本の色摺に対する許容が異なること、それが与えた影響について論じた。

(6) 日本近世文学会136回大会(鶴見大学、2018年6月9日)において「合巻の相板元一馬琴と種彦のトレード」を發表した。これは江戸馬喰町の西村屋与八と芝神明前の和泉屋市兵衛が、それぞれ抱え込んでいた柳亭種彦と曲亭馬琴という人気作者の作品を交換することにより提携を図ったことを明らかにした。これにより馬喰町地区と芝神明地区の板元の包括的な提携が始まり、合巻上製本刊行への道を開くものであることも明らかにした。

(7) 合巻の様式の変遷を紙という視点から取り上げた研究を遂行した。第6回日本語の歴史的典籍国際研究集会(国文学研究資料館、2020年11月8日)において「上紙摺と上製本 合巻研究への高精細デジタルマイクロスコープの利用」において、上紙摺や上製本の合巻の20倍~500倍の2D,3D画像を示すことにより、紙の繊維の間の米粉の存在とその果たす役割について論じた。また佐藤悟「色彩に溢れた文化」(2021)において用紙中の米粉の存在が江戸時代の色彩溢れる出版文化において不可欠であったことを論じた。さらにシンポジウム「紙のレンズから見た古典籍 -- 高精細デジタルマイクロスコープの世界」(2021年3月13日)において佐藤悟「『修紫田舎源氏』の料紙について 紙質と価格の関係」により、柳亭種彦作、歌川国貞画の合巻『修紫田舎源氏』(1829-1842)の料紙が松亭寿山作、一猛斎芳虎画『忠孝誉石碑』(1842)などの同時期の合巻の料紙よりもはるかに高品質であることを示し、その価格の推測を行った。これにより天保改革における『修紫田舎源氏』の絶板が従来いわれているように將軍徳川家斉の大奥生活を風刺、あるいは『修紫田舎源氏』による風俗紊乱が原因ではなく、その高価格が原因であったことを、浮世絵等の価格との比較から論じた。これにより文理融合型の新しい研究スタイルを確立することができたと考える。

(8) 服部仁「八代目市川團十郎を描いた浮世絵 (5)天保期の八代目ほか」(2019)、「春朗画孟母機織り図について : 『駒組童観抄』見返し図」(2020)は浮世絵と絵本の関係について論じた。

(9) 第11回絵入本ワークショップにおいて松原哲子「草双紙試論 - 呼称・内容と時代との関係について - 」(2018)という発表を行い、赤本の刊行について論じた。さらにその一部が「赤本についての一考察 - 『菊寿草』序文「花さき爺が時代」の意味するもの - 」(2020)として活字化された。

(10) 本研究を進めるために、2018年12月15日・16日に韓国日語日文学会と共催で第11回絵入本ワークショップを開催した。詳細は以下の通り。

延広眞治(東京大学名誉教授)「江戸の絵をよむ」 佐藤悟(実践女子大学)「草双紙の世界
ソウル大学校所蔵本を中心に」 飯倉洋一(大阪大学)「『撰津名所図会』における挿絵の役割
高永珍(同志社大学)「『意馬心猿』図と『紀三井寺開基』の挿絵 - 相違の要因としての演出と
図様の展開 -」 高杉志緒(釜山日本文化研究所)「斎藤秋圃の挿絵本について」 洪晟準(檀
国大学)「知識伝達媒体としての挿絵」 神作研一(国文学研究資料館)「和歌絵本 と絵入り
歌書刊本と」 武藤純子(跡見学園女子大学)「『絵本小倉錦』の出版経緯と特色 - 跡見学園女子
大学図書館蔵本に注目して -」 小笠原広安(駒澤大学)「『蛇を啜る蛙』の図に関する一考
察」 片龍雨(全州大学)「歌舞伎における老いの描写」 金英珠(韓国外語大学)「視覚化か
ら見る神話の生成と変容」 井上泰至(防衛大学)「絵入り本の『黄昏』 - 正岡子規の受容 -」
金美眞(ソウル女子大学)「ソウル大学図書館所蔵合巻の装丁 - 文政期以後の作品を中心に -」
松原哲子(実践女子大学)「草双紙試論 - 呼称・内容と時代との関係について -」 神林尚子
(鶴見大学)「『お竹大日如来 稚絵解』の成立とその背景」 曾田めぐみ(東京国立博物館)「幕
末期の合巻からみる摩耶夫人のイメージ - 朝鮮仏画『釈迦誕生図』とのかかわりから -」 康
志賢(全南大学)「三亭春馬作合巻『紫菜浅草土産』の書誌考 - 摺付表紙及び、板元文会堂山田
屋佐助と錦重堂上州屋重蔵を中心に -」 山本和明(国文学研究資料館)「覆刻本版下について
- 草双紙を例に -」 吉丸雄哉(三重大学)「絵入本にみる忍び装束の発生と定着」 崔京国(明
知大学)「浅井了意『三綱行実図』の挿絵」

(11) 本研究を進めるために、2020年9月19日に大阪大学 ZOOM 会場において第12回絵入本ワ
ークショップを開催した。詳細は以下の通り。 李俊甫(大阪大学・院)「武者絵本の版下本
蘭徳齋画『大中記』について」 古明地樹(総合研究大学院大学・院)「柏原屋絵本出版考
類板訴訟記録を中心に」 佐藤悟(実践女子大学)「赤本『女はちの木』について」 亀井森
(鹿児島大学)「国学者の絵巻模写 - 長沢伴雄稿『年中行事画卷略』を中心に -」 盛田帝子(大
手前大学)「ホノルル美術館所蔵『十番虫合絵巻』をめぐって」 加藤弓枝(鶴見大学)「妙法院
宮サロンにおける絵師と歌人の交流 呉春と蘆庵を中心に」 木場貴俊(国際日本文化研究セ
ンター)「可視化される日本史 絵入年代記に見る歴史像」 木越俊介(国文学研究資料館)
「寛政～文化年間の名所図会と怪談・奇話・仏説」 井上泰至(防衛大学校)「19世紀における
蔚山城の清正 『絵本太閤記』、および鍋島家旧蔵朝鮮軍陣図屏風から」 大島結生(法政大学・
院)「イングランドのチャップブックと近世日本の絵入り本-The World Turned Upside Down と
『無益委記』を通して-」 原田喜子(株式会社トッパングラフィックコミュニケーションズ/
京都芸術大学非常勤)『繪本どんきほうて』にみる芹沢銈介の近代的美意識」 大和あすか(東
京藝術大学・院)「豪華絵本と摺物に使用された彩色材料」 日比谷孟俊(実践女子大学文芸資
料研究所)・大和あすか(東京藝術大学大学院美術研究科)・下山進(デンマテリアル株式会社)「新
吉原江戸町一丁目和泉屋平左衛門花川戸仮宅之図」の色材分析と開板動機」

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 佐藤悟	4. 巻 36
2. 論文標題 大津絵と近世文学	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 48 - 58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤悟	4. 巻 53
2. 論文標題 大津絵節と合巻	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大津絵	6. 最初と最後の頁 69 - 71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松原哲子	4. 巻 98
2. 論文標題 赤本についての一考察－『菊寿草』序文「花さき爺が時代」の意味するもの－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践国文学	6. 最初と最後の頁 57-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002195	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 服部仁	4. 巻 179
2. 論文標題 春朗画孟母機織り図について：『駒組童観抄』見返し図	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 浮世絵芸術	6. 最初と最後の頁 51-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34542/ukiyoart.1818	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 服部仁	4. 巻 181
2. 論文標題 八代目市川團十郎を描いた浮世絵 嘉永年間の八代目	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 浮世絵芸術	6. 最初と最後の頁 54-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34542/ukiyoart.1849	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤悟、八木正白、藤田達生	4. 巻 39
2. 論文標題 古筆手鑑『筆陣』所収羽柴秀吉書状	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践女子大学文芸資料研究所『年報』	6. 最初と最後の頁 8, 159 - 187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002119	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤悟	4. 巻 179
2. 論文標題 書籍紹介 鈴木重三『絵本と浮世絵 : 江戸出版文化の考察』改訂増補版 : 鈴木重三先生のお仕事 : 桃李もの言わざれども	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 浮世絵芸術	6. 最初と最後の頁 64 - 67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34542/ukiyoart.1822	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 服部仁	4. 巻 18
2. 論文標題 殿村篠斎作の戯文『阿嬌(おたか)物語』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 雅俗	6. 最初と最後の頁 88 - 97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤悟	4. 巻 108
2. 論文標題 『鹿鷲集』をめぐる諸問題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近世文藝	6. 最初と最後の頁 1 - 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20815/kinseibungei.108.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件(うち招待講演 3件/うち国際学会 7件)

1. 発表者名 佐藤悟
2. 発表標題 「19世紀絵本の地域性—色摺本と墨摺本—」
3. 学会等名 国際浮世絵学会(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤悟
2. 発表標題 「文化元年の彩色摺禁止令と絵本」
3. 学会等名 国際浮世絵学会(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤悟
2. 発表標題 「赤本『女はちの木』について」
3. 学会等名 第12回絵入本ワークショップ(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤悟
2. 発表標題 上紙摺と上製本 合巻研究への高精細デジタルマイクロスコープの利用
3. 学会等名 国文学研究資料館：第6回日本語の歴史的典籍国際研究集会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤悟
2. 発表標題 『修紫田舎源氏』の料紙について 紙質と価格の関係
3. 学会等名 シンポジウム：紙のレンズから見た古典籍
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤悟
2. 発表標題 十九世紀絵本の地域性－色摺本と墨摺本－
3. 学会等名 国際浮世絵学会：第23回国際浮世絵学会春季大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤悟
2. 発表標題 合巻の相板元－馬琴と種彦のトレード－
3. 学会等名 日本近世文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤悟
2. 発表標題 「柳亭種彦と葛飾北斎・西村屋与八の関係 文政期江戸出版の構図」
3. 学会等名 日本近世文学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤悟
2. 発表標題 「草双紙の世界 ソウル大学校所蔵本を中心に」
3. 学会等名 韓国日語日文学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤悟
2. 発表標題 「千年飴をめぐる諸問題 - 柳亭種彦の考証随筆 -」
3. 学会等名 追憶のなかの 江戸 - 江戸は人びとの記憶のなかでどのような都市として再構成されたのか -（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松原哲子
2. 発表標題 「草双紙試論 - 呼称・内容と時代との関係について -」
3. 学会等名 第11回絵入本ワークショップ（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 法政大学江戸東京研究センター(編) 佐藤は共著者の一人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 272
3. 書名 好古趣味の歴史	

1. 著者名 東洋文庫(編) 佐藤は共著者の一人	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 200
3. 書名 岩崎文庫の名品	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	服部 仁 (Hatsutori Hitoshi) (20103153)	同朋大学・文学部・教授(移行) (33911)	
研究分担者	上野 英子 (Ueno Eiko) (60205573)	実践女子大学・文学部・教授 (32618)	
研究分担者	松原 哲子 (Matsubara Noriko) (70796391)	実践女子大学・研究推進機構・研究員 (32618)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 第11回絵入本ワークショップ	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 第12回絵入本ワークショップ	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
フランス	フランス極東学院	ギメ美術館図書館	
韓国	韓国日語日文学会	明知大学校	